



森林と市民を結ぶ全国の集い 2025 (第 29 回)

森活しよう！

～山から街までの生物多様性保全をめざして～

報告書

■実施日程

2025 年 4 月 22 日 (火) ～5 月 30 日 (金)

4 月 22 日 (火) セッション 1

5 月 23 日 (金) セッション 2

5 月 30 日 (金) セッション 3

5 月 17 日 (土) ・ 18 日 (日) フィールド編@大阪府富田林市

■主 催

「森林と市民を結ぶ全国の集い 2025」実行委員会

公益社団法人国土緑化推進機構

実行委員長：鹿住 貴之 (認定 NPO 法人 JUON(樹恩) NETWORK 理事・事務局長)

■後 援

日本林業協会、全国森林組合連合会、全国木材組合連合会、全国市長会、全国知事会、全国町村会、

森林づくり全国推進会議、林野庁

■事務局

NPO 法人森づくりフォーラム

目 次

■ 開催趣旨・日程・プログラム概要.....	3
■ プログラムレポート	6
■ 参加実績・参加者アンケート	16
■ これまでの「森林と市民を結ぶ全国の集い」	25
■ 「森林と市民を結ぶ全国の集い 2025」実行委員 スタッフ名簿	26

■開催趣旨・日程・プログラム概要

■開催趣旨

私たちの暮らしを支える森林・自然は、多種多様な生き物たちのすみかであり、「生物多様性」の宝庫でもあります。

日本では、里山に代表されるような、人々の利活用を通じて形成された森林・自然が多く存在しています。

人と生き物たちと自然環境の間で、複雑な相互関係から成り立つ
このような生態系は、現代において山や農山村地域だけではなく、
公園や緑地といった形で都市部にまで広がっています。

今回の「森林と市民を結ぶ全国の集い」は、
私たちが山から街までの生物多様性を育み、豊かにしていくために
できることについて考え、行動するきっかけをつくることを目的に開催します。

■日程

実施日時	プログラム
4月22日（火）19:00～21:00	オンライン編・セッション1
5月23日（金）19:30～21:00	オンライン編・セッション2
5月30日（金）19:00～21:00	オンライン編・セッション3
5月17日（土）～18（日）	フィールド編@大阪府富田林市

■参加費

プログラム	項目	料金	参加形態
講演動画視聴	無料視聴	無料	オンライン配信（要申込）
オンライン編 セッション1・2・3	一般（早割）	1,000円	オンライン配信/アーカイブ
	一般（通常）	1,500円	オンライン配信/アーカイブ
	学生	500円	オンライン配信/アーカイブ
	応援・協賛	3,000円	オンライン配信/アーカイブ
フィールド編 (オンラインセッション 含む)	一般	13,000円	宿泊希望（5/17夕食・5/18昼食付）
	学生	11,000円	
	一般	3,500円	宿泊なし（5/17夕食・5/18昼食付）
	学生	2,500円	
	一般	1,500円	5/18のみ参加
	学生	1,000円	

※応援・協賛金の一部は「緑の募金」に寄付

■プログラム【オンライン編】

◇基調講演

・渋沢 寿一（農学博士）

『日本の森と地域』

◇セッション1

4月22日(火)19:00～21:00

<人口激減時代の生物多様性を考える>

話題提供	深澤 圭太（国立環境研究所） 嵯峨 創平（ヤマノカゼ舎／京都大学大学院 地球環境学舎博士課程）
コーディネーター	赤池 円（私の森.jp）
コメンテーター	小森 耕太（認定NPO法人 山村塾）

◇セッション2

5月23日(金)19:30～21:00

<生物多様性を見える化しよう～ビッグデータを活用した新しい森づくり～>

話題提供	中井 照太郎（青葉組（株式会社 GREEN FORESTERS）） 竹澤 正浩（三井不動産株式会社）
コーディネーター	水谷 伸吉（一般社団法人 more trees）
コメンテーター	國岡 将平（合同会社 MANABIYA／智頭町 地域林政アドバイザー） 後藤 洋一（NPO法人 樹木・環境ネットワーク協会）

◇セッション3

5月30日(金)19:00～21:00

<市民・企業が都市で森をつくるには？>

話題提供	竹内 智子（千葉大学大学院園芸学研究院 准教授） 志賀 壮史（NPO法人グリーンシティ福岡） 高橋 優希（東京建物株式会社）
聞き手・ コーディネーター	小野 なぎさ（一般社団法人 森と未来） 坂本 有希（フェアウッド・パートナーズ、一般財団法人 地球・人間環境フォーラム） 矢島 万理（公益社団法人 国土緑化推進機構）

■プログラム【フィールド編】

5月17日（土）13:00～18日（日）12:00

<新しい里山的生き方＝生物多様性保全？>

会場：NPO 法人里山俱楽部フィールド、大阪府富田林市 市民会館 ほか

集合：富田林駅 5月17日 13:00～バスで会場へ移動 ※解散：富田林市 市民会館 5月18日 12:00

日程	内容
5月17日 13:00	富田林駅 集合・バスで移動
13:30	持尾展望台に到着
13:45	現地到着・レクチャー
14:15	フィールド観察
17:00	観察終了・夕食準備
18:00	懇親会
20:00	夕食・懇親会
20:30	宿泊地到着（ワールドヴィレッジ）
5月18日 8:30	宿泊地出発
9:00	富田林市市民会館 松の間 到着
9:15	受付開始
9:30	意見交換・ディスカッション
12:00	閉会・昼食
13:00	オプションツアー ※両日参加者のうち希望者のみ (堺第7-3区「共生の森づくり」フィールド)

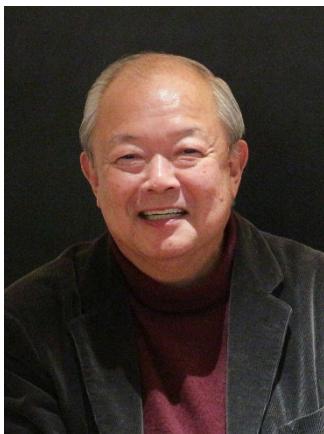
意見交換 ディスカッション 出演者	寺川 裕子 (NPO 法人 里山俱楽部) 夏原 由博 (公益社団法人 大阪自然環境保全協会) 新田 章伸 (NPO 法人 里山俱楽部) 松村 正治 (NPO 法人 よこはま里山研究所)
-------------------------	---

プログラムレポート

■基調講演（動画配信）

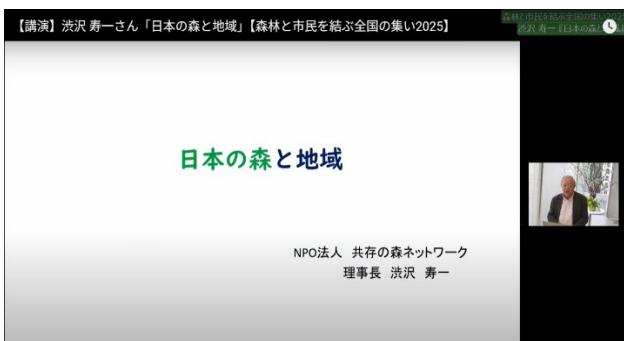
講演『日本の森と地域』

農学博士 渋沢 寿一さん



渋沢 寿一（しぶさわ じゅいち）さん プロフィール

1952 年生まれ。1980 年東京農業大学大学院修了。国際協力機構専門家としてパラグアイに赴任後、長崎オランダ村ハウステンボスの企画、経営に携わる。現在は、NPO 法人共存の森ネットワーク理事長。全国の高校生 100 人が「森や海・川の名人」をたずねる「聞き書き甲子園」の事業をはじめ、森林文化の教育・啓発を通して、人材の育成や地域づくりを手がける。明治の実業家・渋沢栄一の曾孫。著書に「森と算盤」（大和書房）他。



本講演では、「森の聞き書き甲子園」をはじめとした渋沢さんのこれまでの取組みと合わせて、森

林の循環的な利活用による、持続可能な生活を営んできた日本各地における事例が紹介された。

第二次世界大戦後の拡大造林やエネルギー革命が、日本の循環社会を破壊した要因であると指摘し、現代社会が経済性や効率性を追求するあまり、「無縁社会」となっていると警鐘を鳴らしている。

最後に、持続可能な社会を築くためには、経済・社会・環境のモデルだけでなく、生き方や働き方のモデルを変える必要があるという提言で締めくられた。

トークセッション『山から街までの生物多様性保全をめざして』



この動画は講演者・渋沢寿一さんと、「森林と市民を結ぶ全国の集い 2025」実行委員の 4 名によるトークセッションを収録したもの。実行委員の小野なぎさん（一般社団法人森と未来/東京）、小森耕太さん（NPO 法人山村塾/福岡）、寺川裕子さん（NPO 法人里山俱楽部/大阪）、水谷伸吉さん（一般社団法人 more trees/東京）の 4 名が参加した。

小森耕太さんからは、福岡県八女市での活動経験から、人口減少時代における人と森の関わり方について言及し、都市に住む人々がどのように山に関わっていくべきか、問いかけがあった。

渋沢さんは、森側が都市の人間を受け入れるだけでなく、自然の中で暮らす作法や、資源生産性という観点から物事を考える必要性を強調し、教

育の場としての廃校の活用や、持続可能な社会を築くための新たな教育システムの必要性を語った。

水谷伸吉さんからは、宮崎県諸塙村での自団体での取り組みの経験から、地域に根ざした文化の担い手不足の現状において、関係人口が地域社会や生物多様性保全の担い手になり得るかという問い合わせが投げかけられた。

渋沢さんは、関係人口的な関わり方はやらないよりは良いとしつつも、担い手としてどこまでなりうるかは難しい問題であるとし、人口減少社会において、人間が何を基準に生きるかという大転換が必要ではないか、と答えた。また、祭りの本質は神様（自然）と共に生きることであり、その精神性を抜きにしては、地域づくりはできないと語った。

また水谷さんからは、企業による森林保全の取り組みにおいて、数値化・定量化を重視する傾向があることについて問い合わせもあった。

渋沢さんはこれに対し、単なる定量化の限界を指摘し、人間と自然の関係性を立体的に捉えることの重要性を強調した。また、江戸時代におけるゼロカーボンな暮らし方など歴史から学び、人間が自然との適正なバランスを模索すべきだと述べた。企業には、新しいものだけでなく過去の知恵も活かした共存モデルの構築を期待し、自然との関わり方を体感できる教育の必要性も訴えた。

寺川裕子さんからは、里山的な生き方、暮らし方を取り入れるための若者たちへの提案として、自然との関係性をどう築いていくか、その具体的なヒントとしてどのようなものが考えられるか、という問い合わせがあった。

渋沢さんは、人間も自然の一部であり、自分自身の身体が最も身近な環境問題であるという認識から、自然との関わり方を再認識することの重要性を説かれた。また、情報が溢れる現代において、正解が一つではない中で、自ら選択し、判断する力を養う教育の必要がある、と強調した。

小野なぎささんからは、現代の多様な価値観の中で、人工林を嫌う人もいれば、その併まいを美しいと感じる人もいるように、森の多様性を認め、楽しむことが重要になってきているとの感想を述べた。

それを受け、渋沢さんは農業や林業が地球上で最大の環境破壊であるという側面を指摘しつつも、それがなければ人間は生きていけないという現実を認め、人間が自然とのバランスをどう取っていくか、その答えは人間側にある。そして、地域や個人が、自分たちの価値観を決め、自分たちの生き方を創造していくことが重要なのではないか、と述べた。



■基調講演およびトークセッション動画は、開催期間中 YouTube に限定公開し（要申し込み）、合計 1,000 回の視聴再生があった。

■セッション1 「人口激減時代の生物多様性を考える」

<趣旨>

日本の里山には豊かな生態系があることはよく知られている。人がそこに暮らし自然を利用することで、多様な生物の生活圏を支える。人がその地域で暮らすことから撤退し、自然に関わることをやめると、何が起こるのか？

多くの人は、生態系は「もとあった豊かさを取り戻す」と考えるが、必ずしもそうではないことがわかつてきただ。

発表者の発言趣旨、印象に残った発言

1 深澤 圭太さん（国立環境研究所）

里山の生態系を研究する深澤氏は、廃村となつた里山地域の生態系について調査している。調査では、日本各地の34の廃村とそれらに近接する、人の住む集落との比較から、土地放棄がチョウ類に与える影響を明らかにした。その結果、土地放棄によって多くの種が減少し、特に低い気温を好む草原性のチョウ類が減少しやすいことがわかつた。しかも、廃村となって数十年が経過しても減少した種が戻るわけではないこともわかつてきただ。深澤氏らは、チョウだけでなく、最終氷河期以降の草原性生物の存続にとって、ヒトによる土地利用（農耕・たらら製鉄など）によってつくられた環境が欠かせない要因であると推測している。

2 嵐峨 創平さん（ヤマノカゼ舎）

日本の気候帯の境界にあって、植物の多様性が高く、平安時代から薬草文化が続く伊吹山の春日地域について嵐峨氏にお話いただいた。春日地域には、伊吹山の薬草文化の中心地であり現在唯一残された薬草生産地、笹又耕地がある。笹又集落は、1975年に廃村となつたが、それでもこの地区

に通い、移住する人が増えているという稀有な状況がおきている。また、雪崩被害や獣害をきっかけに、薬草栽培地・薬草文化を守ろうと、クラウドファンディングが組織され、「笹又地蔵祭」には150人の人々が参加し、あらたなコモンズの形成を期待させるものとなつた。

まとめや感想など

2つの発表から、里山の生物多様性を維持するには、土地を放棄せず、人による利用を継続する工夫が必要であること、廃村になってからでもITなどを通じて人やお金を集めることができている事例などを学んだ。



<報告者>

赤池 円（私の森.jp 編集長）

■セッション2

「生物多様性を見る化しよう～ビッグデータを活用した新しい森づくり～」

<趣旨>

生物多様性の測定や指標設定への関心が高まっている。新たなテクノロジーやビッグデータを活用して、森林・里山保全の成果や生物多様性度を測ることはできるのか。生物多様性の「見える化」やビッグデータを活用した新たな森づくりに取り組む2社からの具体的な取り組み事例をもとに、ディスカッションを行った。



発表者の発言趣旨

1 中井 照大郎さん（株式会社 GREEN FORESTERS 代表取締役）

GREEN FORESTERS は「林業の自然資本产业化」をミッションに掲げ、伐採放棄地の増加や造林従事者の減少といった現代林業が抱える課題に取り組んでいる。特に、森を育てる造林業に特化した活動を展開している点が特徴である。

事例紹介では、スキー場跡地などの伐採地において植生の回復を進め、生物多様性への影響を定量的に測定。放置された土地では種数が減少するが、植林を行うことで植物の種数を 1.8 倍に回復させることができ、100 種を超える動植物の生息地が形成される可能性が示されている。

さらに、草地の一定割合を意図的に維持することで、草本植物やルリビタキなど草地性の鳥類の生息環境も確保し、単に森林を回復させるのではなく、湧水地・草地・森林のバランスある構成によ

り、多様な生物が共存できる環境づくりを目指している。

2 竹澤 正浩さん（三井不動産株式会社 サステナビリティ推進部）

三井不動産では、「植える・育てる・使う」という循環型の森づくりを「終わらない森」として位置づけ、北海道の約 5,000ha におよぶ自社所有林で持続可能な林業を推進している。

また都市開発においても、緑地の量と質を数値で評価しており、同社の代表的な大規模開発プロジェクトでは、開発前と比較して緑の「量」は東京ミッドタウンなど 9 物件で 2.6 倍、日本橋エリアの 6 物件では 4.4 倍に増加したと報告。

さらに、東京ミッドタウンの事例では、地域在来種の植栽種類が開発前の 8 倍に増加し、それにより敷地に呼び込める鳥類の種数が 1.8 倍、チョウ類は 1.4 倍に増加したと推計されている。



まとめ・感想

生物多様性の「見える化」や「定量化」には、モニタリングの継続性やデータの信頼性といった課題も多いが、こうしたアプローチへの社会的関心とニーズは今後ますます高まることが予想される。一方で、生物多様性そのものを「目的」とするのではなく、私たちの暮らしの質や価値観の結果として生物多様性が育まれるような社会を目指す視点も重要である。

<報告者>

國岡 将平（合同会社 MANABIYA 代表社員）

■セッション3「市民・企業が都市で森をつくるには？」

<趣旨>

都市・都市近郊の森=アーバンフォレストの活動が注目されている。都市住民にとって身近な森（緑地・公園など）の価値や現況や課題を知り、市民・企業がそれぞれで実践・参加できるアプローチについて考えた。



発表者の発言趣旨

1 竹内 智子さん（千葉大学大学院園芸学研究院 准教授）

都市緑地政策の専門家として、東京都庁での実務経験と研究をもとに、都市の緑の多様な役割と課題を紹介。ヒートアイランド現象の緩和や豪雨時の保水力、生物多様性の確保など、都市緑地の機能をSDGsの視点から整理。近年の気候変動や樹木事故、管理費の減少といった課題に触れ、市民・企業・行政の連携による「育てる緑」の重要性を訴えた。

2 志賀 壮史さん（NPO法人グリーンシティ福岡 理事）

福岡市での市民による都市の森の保全活動を紹介。特別緑地保全地区での間伐や土留め、観察会、クラフト体験など、多世代が関わる活動を展開。近年は「ガイドウォーク」に力を入れ、都市の森の魅力を伝える場づくりを実践。都市の森の特徴として、アクセスの良さと同時に、近隣住民との関

係性や法令遵守、多様な参加者への配慮が求められる点を強調した。

3 高橋 優希さん（東京建物株式会社ビルマネジメント第一部課長代理）

東京・大手町の再開発で「大手町の森」を創出した事例を紹介。自然の森を都市に再現するため、千葉県で3年間の実証実験を経て移植する「プレフォレスト工法」を採用。落葉樹中心の多様な植栽により、ヒートアイランド緩和や生物多様性の確保、水循環の再構築を実現。企業としての挑戦と、森を活用したイベントや認証取得による価値の可視化にも取り組んでいる。

ディスカッションで印象に残った点

質疑では、都市の緑の「質」をどう高めるか、緑化政策の評価指標、企業が森づくりに取り組む動機、市民の関与の広げ方などが議論された。



小野なぎさんは、都市の緑の「質」の変化や市民の価値観の変化について質問。竹内さんは、都市の緑は密植や老朽化により更新が必要であり、歴史や用途に応じた見直しが重要と答えた。また、志賀さんは、都市の森は木が育っても地下環境が悪化しており、再生が難しいと指摘。高橋氏は、企業の森づくりは担当者の熱意や地域性への配慮が原動力であり、維持管理の工夫が必要だと述べた。

坂本有希からは、多様な価値観を持つ都市住民に緑を「自分ごと」として捉えてもらうにはどうすればよいかを問いかけた。志賀さんは、都市の森は作りやすいからこそ「本来性」や歴史的背景を踏まえた丁寧な設計が必要と述べた。竹内さんは、緑のゾーニングや市民の声を反映する制度が

整いつつあり、提案や対話が重要と強調。市民・行政・企業の協働による価値の共有が鍵であると応じた。高橋氏は、企業の思いや制度的支援が後押しとなり、都市の森が環境貢献とウェルビーイングの場になる可能性を語った。全体を通じて、都市の森を「自分ごと」として捉える視点の共有が重要であることが確認された。

<報告者>坂本 有希
(フェアウッド・パートナーズ、一般財団法人 地球・人間環境フォーラム)

■フィールド編 「新しい里山的生き方＝生物多様性保全？（大阪府富田林市）」

＜趣旨＞

身近な里山での保全・利用活動と生物多様性保全が一体となった暮らしとは。大阪府富田林市にて2025年5月17日（土）・18日（日）の2日間でフィールド編を実施した。初日は、「里山で暮らす、自然とともに生きていこう」をテーマに大阪府河南町で里山保全活動を続けているNPO法人里山俱楽部の活動フィールドを視察した。2日目は、大阪の里山指標調査の取り組みを学びながら、日本の自然観を取り入れた身近な里山での暮らし方を考えた。

＜フィールド編 初日＞

NPO法人里山俱楽部の活動フィールド視察

フィールド編テーマの「新しい里山的生き方」は、今回訪問地の里山俱楽部のコンセプトから設定したもので、初日はその実践の場がどのような状況になっているか、つぶさに見てもらった。スタート地は小さな棚田から、簡単な顔合せをした後、無農薬の米づくりや崩れた畔の石積み復旧などを見学、隣接する雑木林の落ち葉堆肥やソーラーパネルの水洗トイレなど、できるだけ現地の資源で必要物をまかなう活動を展開している。



つづいてメインの見学地である雑木林へ。1995年頃 3mの笹を全面刈りして萌芽更新と植樹、毎

年の草刈り管理で約30年、昔ながらの薪炭林として美しく育った林内を歩いた。このような薪炭林に入ったのは初めてという方もいて、明るい林床や伐採後に萌芽した切り株、笹と見分けのつかないササユリの芽生えなどを実際に見ることを通じて、30年の成果を肌で感じてもらえたと思う（夜の懇親会では、この雑木林で撮影されたイノシシ、キツネ、アナグマ、タヌキなどの映像も紹介）。

その後、里山俱楽部の活動拠点地まで徒歩移動し、小休憩をはさんで拠点小屋下の斜面を見学。この斜面は2016年の最初の崖崩れを単管パイプと土嚢による土留め工事（手作業）で一旦復旧したもの、2023年の大雨で再び崩壊した。その原因が水を潜らせる土嚢の大量使用と判明したため、坂田昌子氏が全国で指導されているシガラ工法に転換して、現在、再度の復旧に取り組み中である。みなさん、これが近頃うわさのシガラ工法か…と興味津々で、枝と落ち葉だけなのに驚くほどしっかりしていること、たいへん手間がかかるが誰でも出来る工法であること、そして何より生物多様性ゆたかな森の基盤となることに、きっとそれぞれの気づきがあったと思う。



夕食は里山俱楽部のシェフが腕をふるった里山カレー（温泉卵付き！）を美味しくいただき、焚火を囲んでの自己紹介タイムは、森づくり仲間の集いらしい賑やか＆なごやかな風景だった。最後にデザートの「シガラケーキ」に驚いてもらって宿

泊地に移動、明日の朝を心配しながらも夜中まで大いに盛り上がり、交流が深まったのは言うまでもない。

＜報告者＞

寺川 裕子（NPO 法人里山俱楽部 事務局）

＜フィールド編2日目＞

意見交換会・ディスカッション

フィールド編2日目は富田林市 市民会館で「新しい里山的生き方＝生物多様性保全？」をテーマに意見交換会・ディスカッションを実施した。



まず、里山俱楽部の活動紹介を事務局の寺川裕子さんから行った。里山俱楽部は 1989 年に前身団体が発足、1995 年に里山俱楽部として任意団体設立、2002 年に法人化。里山保全、生産物販売、環境教育、人材育成、自然エネルギー活用、オーダーメイド型研修など多岐にわたる活動を展開。

設立当初のコンセプトは「好きなことして、そこそこ儲けて、いい里山をつくる」。現在は「新しい『里山的』生き方・暮らし方の提案」に変えた。2017 年からは「里山と暮らす応援講座」を毎年開催し、旧暦やシガラなど多様なテーマを扱う。各グループは独立採算制で自由に活動し、その結果としてよい里山が形成されている。大阪自然環境保全協会の「里山指標生物調査」では、草本は 40 種中 26 種 (65%)、木本は 20 種中 8 種 (43%)、ほ乳類は 5 種中 3 種 (60%) が確認された。

続けて、里山俱楽部代表の新田章伸さんが、子どもと自然の取り組みについて紹介した。「子どもと自然」をテーマに里山キッズクラブを主催。

活動を通じて、理論と実践のバランスの重要性に気づき、「日本の自然観」を基盤とした実践研究会を設立。自然観は「おのづから」を中心に、「和・敬・清・寂・愛」の 5 要素で構成され、自然を命として全体的に捉えるホリスティックな視点を重視している。

現行の「里山っ子クラブ」では、幼児から親までが参加し、「自然体」の生き方を体験的に学ぶ。より多くの子どもに届けるため、2003 年から地元小学校でも活動を展開。自然を通じて多様性を理解し、人間関係にもつなげている。

次に、大阪自然環境保全協会の会長の夏原由博さんから、お話をいただいた。里山の自然再生には、人の手による管理が不可欠。マツタケが減ったのは落葉かきの減少が原因で、草地や湿地も大きく減少している。里山は人が作り、維持してきたものであり、放置すれば自然は失われる。活動地の穂谷では竹藪が増え、農地が放棄されているが、これを元に戻すことが目的。協会は 1982 年から全国に先駆けて里山活動を開始。調査・講座・シンポジウムなどを通じて、保全・文化・提言の 3 分野で活動。地権者や行政と連携し、学校や地域とも協働している。持続には、目標の明確化、地域との関係、生物モニタリング、遊び心、資金調達が重要。

そして、休憩を挟み、松村正治さんの進行でパネルディスカッションを行った。主な内容は以下の通り。



・里山活動の継続性と多様性：里山俱楽部は「楽しさ」や「主体性」を重視した活動を通じて、生物多様性の向上に貢献してきた。明確な目標よりも、

ゆるやかな指針のもとで多様な人々が関わることが重要。

- ・日本の自然観と文化的背景：「健全な自然観」はホリスティックな視点で自然を命として捉える考え方。欧米的な環境教育の輸入ではなく、日本の文化や地域性に根ざした教育が必要。

- ・木を伐る自然保護と草地・湿地の重要性：木を伐ることも自然との関係を再構築する手段。森だけでなく、草地や湿地の減少が生物多様性に大きく影響しており、保全の対象を広げる必要がある。

- ・活動の目的と配慮のバランス：楽しみながらの活動が結果的に自然に良い影響を与えるが、意図的な配慮が欠けると逆効果になる可能性も。シガラのように人と自然の両立を目指す取り組みが理想。

- ・草地再生と価値の共有：草地の種類や管理方法によって生態系が変わる。関係者間の目的の共有とコミュニケーションが重要。自然の価値を見出すことで保全につながる。

- ・企業との連携と持続可能性：企業活動にも自然観を取り入れ、持続可能な産業と生物多様性の両立を目指すべき。市民レベルの実験を通じて、企業にも具体的な技術と配慮を提示する必要がある。

- ・多様性の本質と社会への応用：自然の多様性を理解することで、人間の多様性も受け入れやすくなる。企業や教育現場にもこの視点を取り入れることで、持続可能な社会の構築につながる。

- ・制度と政策の動向：農林業の改革やオフセット制度の導入により、生物多様性の回復が期待される。NPOも制度設計に関与する準備が求められている。

＜報告者＞

鹿住 貴之(認定NPO法人JUON(樹恩)NETWORK)

オプションツアー

「堺市第7-3区共生の森」視察・見学

二日目午後のオプションツアーは、大阪府堺臨海部にある「堺市第7-3区共生の森」を視察・見学した。この場所は大阪湾に突き出した廃棄物処分場跡地のうち100haで、約20年前から大阪府との協働で森づくりに取り組んでいる。昨年には環境省の「自然共生サイト」にも認定され、大阪湾岸におけるネイチャーポジティブ実践地としても注目されている。当日は、本フィールドで森づくり活動を行っている「NPO共生の森」の理事である寺川（NPO法人里山俱楽部）が案内した。

入口ゲートで大阪府担当者の出迎えをうけ、まずはシンボルとなっているちぬみ山（標高37m）周辺の植樹地を見学した。10年以上前に植樹した山頂付近はすでに埋立地とは思えない森に成長しており、一方、2~3年前に植えた中腹の植樹地はこれからまだ草刈りが必要な低木で、これらが長年継続している森づくりの景観を表わしている。



山頂から大阪湾を一望し、開催中の万博の大屋根リングが見えて盛り上がったのち、草原性の野鳥（チュウヒ、コミミズク等）の生息を目指してオギを移植・育成している草地に移動した。共生の森敷地内には、森林だけでなく草原や池・水辺等の多様な環境があり、約10年前から繁殖が確認されているタヌキのため糞も観察した。

前日の視察が典型的な里山の雑木林だったため、それとはまったく異なる埋立地でのゼロから 20 年かけての森づくりに、みなさん大変興味をもったようだった。また共生の森はまだ一般公開されていないため、全国の森仲間を案内する貴重な機会となった。最後に大阪とは思えない広々とした草原で、シンボルの「ちぬみ山」をバックに記念写真を撮り、帰途についた。



<報告者>

寺川 裕子 (NPO 法人里山俱楽部 事務局)

参加実績・参加者アンケート

<視聴再生数・参加者数>

日程	プログラム	実績	備考
配信	基調講演（渋沢寿一さん）	604回	YouTube再生回数（6/1まで）
配信	基調講演（トークセッション部分）	345回	YouTube再生回数（6/1まで）
配信	主催挨拶・プログラム紹介	171回	YouTube再生回数（6/1まで）
4月22日（火）	オンラインセッション1	79名	
5月23日（金）	オンラインセッション2	69名	
5月30日（金）	オンラインセッション3	60名	
5月17日（土） ～18日（日）	フィールド編	29名	一般参加16名、 実行委員・講師・関係者13名
	合計再生回数 ／参加延べ人数	1,120回 237名	参考：前回実績 動画再生1,784回 延べ参加227名

※オンラインセッションのアーカイブの視聴回数は、Microsoft365 ドライブ上で動画データを再生させる方式のため、回数記録が不可。（有料プログラムはYouTube上にアーカイブ化不可）

<参加チケット申込数>

項目名	申込数	申込数（前回）	備考
基調講演の視聴のみ	265	501	
早割 オンライン編	138	122	
学割 オンライン編	9	14	
一般（通常） オンライン編	34	75	
オンラインセッション アーカイブ	-	4	
応援・協賛	10	9	
一般 フィールド編	18	20	内キャンセル3名
学割 フィールド編	1	5	
合計	475	750	

＜各プログラム参加後の感想＞

◇オンラインセッション（4/22、5/23、5/30）

アンケート回答数：58

1. 参加動機を教えてください。（複数回答可）

回答	回答数
セッションのテーマに興味・関心があったから	52
登壇者に興味・関心があったから	14
森林・林業全般に関する知識や情報を得たかったから	26
持続可能な社会や環境問題への関心から、森林・林業の役割について理解を深めたかったから	36
自身の業務・取組や、研究・学業に関連する最新情報や専門知識を得たかったから	24

2. 今回のセッションについてどのように感じましたか？

回答	回答数
興味深く感じた	24
新しい情報・知見を得ることができた	27
普通	3
期待したほどではなかった	4

3. 参加前に比べて、新たな気づきや発見があれば具体的に教えてください。

4/22：オンラインセッション 1

- ・前提知識があった方がきっとより興味深く拝聴できるのではないかと感じました。
- ・放棄地の森林遷移や人間によって環境が維持されている事例を知れて、勉強となりました。
- ・人が関わることでの生態系への負の影響はよく耳にすることがありましたが、正の関わり方もできるというのが希望に感じました。

・過疎化村落の状況、また、森林を活かしている方々のお話、そうなんだと思いながら聞きました。

・焼き畑（縄文遺跡）と黒ぼく土の分布の一致、現在の土地利用によっては遠い将来の植生（自然環境、生態系）にも影響する可能性があることを知りました。

・知ることは大事だと感じた。

・人口減が生物相も貧困にするというのは、ちょっと衝撃です。

・深澤さんのお話で、放棄された土地が本来の植生に戻ることは少ない、というのは驚きました。人が関わることで里山保全ができ、生物多様性の可能性が広がることは、特に次世代に伝えていきたいと思います。人がいなくなれば温暖化は止められるのではないか、と考える人があまりにも多いなかで、こうした事実は次世代の希望の灯となるのではないかでしょうか。

・阿蘇の黒色土は火山灰の影響だと思っていたが、人の手が加わっていたというのを知らなかった。

・人口減少→耕作放棄される土地が今以上に増える中で、（なんとなくそんな予感はしていましたが）その土地の多くが森林化せず荒廃・劣化していくことが知れてよかったです。里山保全がますます重要であると改めて認識しました。また、深澤様のお話では黒ボク土は縄文人が火入れをしていたことで作られたということ、焼き畑だけでなく「焼き狩り」があったことを初めて知り、大変興味深かったです。嵯峨様のお話は、伊吹山の薬草文化についても初めて知ることばかりでしたので終始興味深く拝聴させていただきました。

・黒ぼく土、縄文人の火入れ里山と生物多様性、耕作放棄地などが自然に森に還らない、薬草文化誇りが集落維持につながる。

・日本は気候的に放置すれば森になると思っていたが人が改変した土地ではそうではない場合が多いという事は驚きだった。

- ・福島県の原発事故などに伴う農村の過疎化への現状の考察。
- ・棚田が放棄されると地滑りリスクが高まるといったお話から、森林も含め一度手を付けたら責任が伴うことを改めて感じました。
- ・放置集落で森林は自然に還らない。
- ・「耕作放棄地は簡単に森に還らない」との話、質問もありましたがこれまでの理解と真逆で面白かったです。また、伊吹山の獣害に負けずに地域を維持していこうとの話も興味深く、機会あれば岐阜側にも行ってみたいなと感じました。

5/23：オンラインセッション 2

- ・地方部（スキー場跡地等）から都市部（再開発エリア）まで、まだまだ人間の努力で生物多様性回復の可能性があることを知ることができました。
- ・ビッグデータを生物多様性の評価（活動、開発によりどの程度のポテンシャルアップに貢献できたか、出来ていそうか）に実際活用している事例を初めて知ることができた。
- ・カーボンオフセットの生物多様性版。
- ・里山保全に興味を持っている高校3年生です。現在里山が抱える問題点の一つ、生物多様性について、将来に向けてどのような活動が実際行われているかを知ることができました。
- ・ビッグデータの扱い方、捉え方。
- ・ファシリテーターがとても上手でした。データは専門家だけで作るものではなくて、生活にどのように繋がっているかが大事という視点が面白かったです。
- ・スキー場のようなところは放置すると多様性が下がる。土壤浸食はアフリカの粗放農業みたいな所をイメージしてましたが、スキー場も浸食されるのですね。考えると、人の通り過ぎた登山道の浸食も近いものがあるのかなと思いました。
- ・将来の森や生物多様性の姿の可視化が進み、それによる新たな取り組みの実現が可能なこと。何より、100年先の未来に向けて、自分たちが生き

ていなかったとしても、データを通して、今自分たちが環境や自然のためにできることがあるのだという事が、数値を通して理解できた事に希望を感じました。

- ・今回の例のようなビッグデータ利用では、出資者・投資家への説明材料としての利用情報にしかなり得ないのだという思いに至った。研究団体・研究者・大学教授・有資格者のモニタリングや調査であればその人物・団体の責任という形で信頼性に裏付けと保証ができるが、その部分がビッグデータでは保証されないために情報とすらいいがたい何かを生成しているように感じる。愚直で高コストで信頼性の高い調査を嫌って、安価な「情報のようなもの」にすがっているように感じる。行政や研究者の使えるデータではないと判断されるものを、出資者になら良いだろうという態度は不誠実に感じた。そういう生成された情報をもとに出資を集めているのは、今後何かしらの法的な規制などがかかるてくるのではないかと感じた。
- ・具体的な企業が生物多様化について、どう取り組み、どう見せているかまたどう感じているかの現時点を聞けて良かった。
- ・森林回復が仕事として成り立つと良いと思う。
- ・職場近くの東京都心のビルの間の緑地が「自然共生サイト」に指定され驚いていたが、今回申請がとても多いと聞いて納得。

5/30：オンラインセッション 3

- ・所属している学校内で上記のように、森林や森づくりに対する価値観やグラデーションを考えていける場をつくりたいと思った。
- ・一人、都心森ウォーキングをして、新たな発見を楽しんでみたいと思います。
- ・「まちなかの森ガイドウォーク」、屋敷や古民家、古い建物と一体になった森の保全。
- ・ウェルビーリングを高める企業向け木育や森のガイド。親子向けには行っているがもっと注目さ

れ、森林保護や保全が促進されると良いと思うので。

- ・新しい視点を探そうと強く思いました。
- ・都市部の森林を利用した、ガイドウォークなどのソフト事業。
- ・都市部に住んでいる私ですが、森づくりに参加する中で、自然とふれあう楽しさを実感し、それを発信してきました。今回のフォーラムに参加して、新たに取り組んでみたいと感じたのは、生物多様性や自然の循環に関心を持つ人を増やす活動です。志賀さんのような町の中にある自然を題材にしたガイドウォークなどを通じて、身近な自然の魅力を伝え、人々が自然とつながるきっかけを提供していきたいと思った。

オンラインセッション複数参加

- ・シンクネイチャーさんを知り興味を持っています。
- ・都心部で「自然共生サイト」の登録が増えたり、緑地を計画的に増やしたりする動きが活発なこと。これらの森・公園・また皇居も含めて、横断的な生息調査が出来たら面白いと思います。
- ・地方よりも、都市部の方が、森林に対する考え方多様であるように感じました。それは、言語化の程度や表現の仕方の部分なのかもしれません。
- ・森づくり、都市の森の整備に関わっているので、竹内さんのお話、志賀さんのお話が特に良く、とても学びが多かったです。国土交通省が市街地の緑被率3%を目指すと言っていることや、森ボランティアのリーダーとして気にすることなど。大変良かったです！！！
- ・他の動植物に対して人間は負の影響ばかり与える存在と思っていたが、そうではない事に驚いた。同時に、現在取り組んでいる保全活動への意欲が高まった。

4. 今回参加して、新たに取り組んでみたいことは何ですか。

4/22：オンラインセッション1

- ・里山の暮らしについてわかりやすい本を探索しようと思いました。
- ・より多くの山村地域に訪問したい。
- ・自分は、障害者ですので、なかなか取り組むものはありません。昔は木々に囲まれて育っていたのですが、現在は、柑橘類(八朔、伊予柑、甘夏等)の育成などを行い、そこから、木々について学んでいます。
- ・森林保全、鳥獣害対策。
- ・薬草を活用したもの作りで里山を活性化してみたい。
- ・現在は個人的に森林にかかわる活動(森林セラピーの提供)をしていて、以前は地元を中心に色々なボランティア活動にも参加していましたが、今後また森林や里山保全の活動にもかかわっていきたいと改めて感じました。
- ・地域の高齢者に野草薬草活用について聞く、野草薬草活用、暮らしの中で様々な植物を活用して暮らしてきたことや生物多様性失われるとどのような影響があるかを知ってもらう機会を作り、その維持のために様々な人々に関わってもらう機会を作る。
- ・身近な山野の薬草に目を向けてみたくなった。
- ・現在の活動継続。
- ・弊社社有林(自然共生サイト「井川山林」)の生物多様性を調査したいのですが、マンパワー不足で進んでいません。ご相談に応じていただけますでしょうか。
- ・(引き続きですが)現在通っている栃木県の里山整備にも生かせるヒントを探していきます。

5/23：オンラインセッション2

- ・今回のお話(オンデマンドでの復習含め)を反芻して何かの糧にしたいです。

- ・森林の調査・評価に関する DX についての情報収集。シンク・ネイチャーさんの HP の閲覧。
- ・環境系の学部に進学できれば、もっと深く勉強するとともに、保全活動にも参加し、将来の職業に活かせていきたいと思っています。
- ・企業が自然資本に与える影響のデータ分析。
- ・自分が実施している森林浴ファシリテーターのアーバンフォレスト森林浴プログラムの中で、今日おうかがいした都心の森での実例なども共有していきたいです。
- ・固定種の野菜の育苗に挑戦しておもしろいので今秋冬はオニグルミやどんぐりの発芽に挑戦しようと思う。本当は育苗、植苗までイベントとしてみんなで楽しみたいと考えているが場所がありません。

5/30：オンラインセッション 3

- ・所属している学校内で上記のように、森林や森づくりに対する価値観やグラデーションを考えていける場をつくりたいと思った。
- ・一人、都心森ウォーキングをして、新たな発見を楽しんでみたいと思います。
- ・「まちなかの森ガイドウォーク」、屋敷や古民家、古い建物と一体になった森の保全。
- ・ウェルビーイングを高める企業向け木育や森のガイド。親子向けには行っているがもっと注目され、森林保護や保全が促進されると良いと思うので。
- ・新しい視点を探そうと強く思いました。
- ・都市部の森林を利用した、ガイドウォークなどのソフト事業。
- ・都市部に住んでいる私ですが、森づくりに参加する中で、自然とふれあう楽しさを実感し、それを発信してきました。今回のフォーラムに参加して、新たに取り組んでみたいと感じたのは、生物多様性や自然の循環に関心を持つ人を増やす活動です。志賀さんのような町の中にある自然を題材にしたガイドウォークなどを通じて、身近な自然

の魅力を伝え、人々が自然とつながるきっかけを提供していきたいと思った。

オンラインセッション複数参加

- ・当社社有林の取組が可視化ができないかと考えています。
- ・色々な立場で森林に触れたいと思いました。まずは、身近な森に定期的に行こうと思います。
- ・海の森公園に行ってみようと思いました。都市の緑の役割について良く考え、近隣住民とのコミュニケーションを上手にとめていきながら、市民の皆さんにもっと市内の森のことを知ってもらう活動もしたい（志賀さんのガイド、良いですね）と思いました。

6. ご意見・ご感想、ご提案や取り上げてほしいテーマや地域等があればお聞かせください。

- ・環境政策や多様性を守るためにには、新しい都市政策に里山の暮らしをどのように実装できそうか？
- ・全体的なダイナミクスと環境が維持されている事例を学べましたが、人口が減っていく中でどのように対応していくべきか、という点の議論を、専門家の方の議論を伺いたかったです。
- ・通信大学で、自然科学(生物)を今年学んでいます。今回のお話は、とてもよかったです。
- ・学術性の高い内容で一般市民としては難しかった。渋沢先生の基調講演ともう少しリンクしてほしかった。
- ・山林売買に関する情報。
- ・観光と生物多様性について。
- ・シカとイノシシの獣害対策について。例えば①日本犬(甲斐犬)を番犬にする、狩猟で仕留めたシカやイノシシを犬のエサにする、日本犬の血統を守ることにもなる等②シカの好きな植物アカメガシワ等を植えてそちらを食べさせる
- ・大変興味深い内容であつという間の 2 時間でした。ありがとうございました。

・シカに新芽が食べられて森の幼苗木が育たないということがおこっているので、シカ害が増えている中で、どうやって森の生物多様性を維持していくか？鹿害が土壤流出にもつながっているので、対策をどうするか？

・北陸の自然に関する講座。

・井川山林で進んでいない調査など、取り組んでいただける先を探しております。

・次回以降も楽しみです。

・次回 3 回目はリアルタイムは無理ですが、オンデマンドで勉強したいです。

・関東近郊で行われている里山保全活動の取り組み。

・福德の森、神社のお話が興味深かったです。最後の方で、三井不動産の中でも 99% の人が知らないかも・・・というようなお話もありましたが、人々の価値観も含めて変えていくものを提示できる可能性がある、ということが印象に残りました。また、トークセッションでもあったように、生物多様性の指標、見える化を進めることが何かの制限の方向ではなく、みんなが前向きに、ポジティブになれるような捉え方を考えていこう、という点に大変、共感しました。

・J-クレジットやビジネス化について。今まで評価されていなかったものが評価される所を目指したいです（実態のない価値もどきでは困りますが）。

・ありがとうございました。

・田舎で育ったのもあり幼い頃から自然が大好きだったので、子供は皆自然の中で遊ぶのが好きだと思い込んでいました。最近、自然に全く興味を示さない子供がいるのを知って、昔からそういう子がいたのか知りたくなりました。大人も含めて自然がヒーリングにならない人がいるのか、いるなら育った環境により知らないからなのかなどを知りたい。今日のテーマも人と自然の循環がカギになってくると思いますが、興味を持ってもらうキッカケ造りのヒントに上記のことを知りたいと思いました。

・バイオームをやったり、昨年某大学の調査に協力したりしていると、データ蓄積の取り組みは実はいろいろなところで別々にされているのではと思いました。見える化できたらできたで、その運用で課題が出てくると思いますが、保護活動のノウハウの共有にもつながるので期待したいです。

・ありがとうございました。一人でもできる小さなステップの森活があれば知りたいです。

・街中の緑を考えたい。今回の企画は興味深かったです。

・どの話も分かりやすく興味深かったです。これだけ環境について色々呼ばれているにも関わらず状況が変わりません。大企業でなくとも個人や小規模ボランティアグループでも可能な森林、緑地の地域への貢献度の計測方法、項目について、評価、他の地域との比較方法などについて知りたいです。

・このまま人為的で急激な地球温暖化が進行すると、東京の 2050 年には夏 42°C、真冬でも 26°C になると想定されています。この急激な地球温暖化は生物多様性を大きく棄損しています。さらに棄損のスピードが速まることが想定されています。生物多様性保全が大切だと言うのなら、まず地球温暖化の緩和策を徹底することが最重要だと考えます。わが家のカーボンニュートラル実現のための行動変容すらできないのに、生物多様性保全について語るのは詭弁ではないでしょうか（まるでグリーンウォッシュそのものだと考えます）。わが家では、生物多様性の保全が重要だと考え、ほぼカーボンニュートラルのくらしを実現しました。

・森に関わる経済、お金の話。山林、都市の緑地などフィールドに関わらず、維持管理や継続利用ができている場所の経済循環の事例、また今後の価値基準の変化の展望など。

・自然や地球環境について、若い世代の取り組みと考え。

・肉体的にもきつい、毎年同じことを繰り返す保護活動を、継続させていくためのモチベーション

は何なのか、ボランティアにそのような継続は可能なのか。続けてきた成果が目に見えて、どこかにあるものなのか。

・東京では緑が増えているということでしたが、都市近郊（私のいる市川市など）ではたぶん、反対に、宅地化の波が止まらず、森や緑が壊され続けています。つまり緑が減り続けています。ぜひ都市の森だけでなく、都市近郊の森の危機とその守り方についていろいろな方のお話を聞いてみたいと考えています。

◇フィールドセッション（5/17～18）

アンケート回答数：15

1. 参加動機を教えてください

回答	回答数
森林・里山環境や生物多様性、その保全の重要性について学びたかったから	10
具体的な里山保全の技術や現場での取り組みを、直接見聞きして学びたかったから	12
フィールドの自然や景観に直接触れ、体験してみたかったから	10
自身のこれから活動・取り組みの参考にしたい、または活かしたいと思ったから	12
この地域で行われている取り組みや、活動する人々に関心があったから	8
その他	3

＜その他回答＞

- ・里山倶楽部の活動地をみたかった。
- ・人とのつながり。
- ・お久しぶりのポッキーさんと会いたかったから。

2. 本プログラムについてどのように感じましたか？

回答	回答数
興味深く感じた	3
新しい情報・知見を得ることができた	24

3. 印象に残った地域の魅力は何ですか？

- ・石積み・やがらなど、自然物を使って整備していたこと。
- ・里山倶楽部の実際のフィールド。
- ・斜面を強化しながら生物多様性を破壊しない「シガラ」。
- ・里山の概念が変わったこと。

・住んでいる場所で保全活動に取り組んでいること。

・好きな人が好きな事ができる、といふことで続いていること、いつも勉強会など最先端の技術を学んでいらっしゃること。

・「一服ひろば」や「シガラダファミリア」など、名前をつけて楽しまれている様子が魅力的でした。また、あずまやの拠点が、カマドがあり焚き火ができ、素敵でした。

・ごはんがおいしかった（子供の意見）。特にビーフシチュー、ハム。森のことが知れた。

・大阪の近郊にこれだけの里山があり、そこで活動しているすばらしい団体があること。

・里山倶楽部様の場所、空気感が最高でした。集落と魅力あふれるたたずまい、訪れることが楽しみになる場所でした。

・そこにいるときに感じる“気持ち良さ”。

・集まった人がやりたい事、得意な事をやる。

4. 参加前に比べて、新たな気づきや発見があれば具体的に教えてください。

・沢山のワードや考え方。シガラ、萌芽更新、石づみ、足もとの自然からはじめる、生物多様性の生き物は人間も（それは私にとってはあたりまえだったが、海外では違うかもということ）新しい里山的生き方暮らしを提案していく！ということ、木を切って自然を守る（そうそうと思うけれど言語化されて実践例をお聞きできたこと、人工股関節置換手術やりバシリ後、初フィールド。今後、里山に来れるとわかったこと。

・減少しているのは、田んぼや海岸であること。生物多様性から見ると、その全てのバランスをとっていくことの大切さに気がつきました。

・楽しく里山活動する大切さを、あらためて。

・ギャップがあることで生物多様性が生まれるということ。

・手を加える自然の意味、手を加えない自然の将来の違いを知ったこと。

- ・生物多様性を自分事にするために、何のために生物多様性を学ぶかは「よりよく生きるため、自分の命を大切にするため」という伝え方はとてもすてきだなと思いました。生物文化多様性という考えは、「日本人は舶来品（概念、プログラム、教材等）が好き」「90年代からの約30年間で、環境教育は思ったほど深まらず、拡がっていない」。
- ・「約50年前（1976年）は保護していたニホンジカのいま」など長いタイムスケールでの肌感覚を学べた。
- ・ムヒを忘れないこと（子供の意見）←力にかまれたこと以外は楽しかった。
- 「しがら」を地域の方自ら作り国土の保全に生かしていること。※4, 5ともいくつもありますが、キレイに文章化できずすみません。
- ・佐用町のユーカリの話を参加者の方から聞いて、問題だな（なんとかしたいな）と思った。生物多様性のディスカッションは話が広がりすぎたかも。あえて人間の多様性には広げない方がよかったかも。
- ・里山の手入れ、生い茂りすぎた山も生き返ることが実感できました。
- 「常識」ってけっこうウソだねー。萌芽更新のリアル（早く大きくなる）昔の自然保ゴは、人と自然を切り離す。
- ・しがら工法、ギャップの大切さ。

4. ご意見・ご感想、ご提案や取り上げてほしいテーマ・地域等があればお聞かせください。

- ・現場の空気感を味わえることがよかったです。
- ・大変お世話になりました。ありがとうございます。非常に勉強になりました。今後もよろしくお願ひいたします。

- ・私にとって大変貴重な経験でした。さまざまな世代の方のお話を聞け、生物多様性の違った見方も知ることができました。2日間ありがとうございました。
- ・シカなどの食害被害の対応策について。

- ・広域の里山林管理にどのように取り組んでいたら良いか。里山にあるスギ、ヒノキ、カラマツ等の人工林の取り扱い方。
- ・ぜひまたフィールドワークを入れてほしいです。最近何でもオンラインで現場に行く機会がないで。
- ・全国的な最近事例だったり、地域で活動で普遍的悩みの解決のヒントになる事例や話し合いができるとうれしいです。テーマとして、自然保護が社会課題解決（Nbs）につながっている事例。特に経済も入っているとよい（そこそこもうかる）
- ・参加者が発言やアウトプット（Slidoなど）できる工夫があると、より議論が深まると思った。継続してつながれるオンラインコミュニティがあるといいと思いました。
- ・火や文化（民族学も）、京都もぜひ！
- ・全国の様々な取り組みについて知りたいです。（今日初参加でした）
- ・街中での生物多様性、街中での里山的くらし。
- ・水源地としての山～海までつながる水がつなぐ生態系と私たちの関わり。
- ・生物多様性やその地域特有のアリシンボル的にそこで守りたい生物（植物含む）の必然性価値を全く興味のない人に届ける（ふに落とさせる）方法。
- ・滋賀や京都でも里山・活動の見学・紹介をしてほしい。
- ・参加者が発言やアウトプット（Slidoなど）できる工夫があると、より議論が深まると思った。継続してつながれるオンラインコミュニティがあるといいと思いました。

これまでの「森林と市民を結ぶ全国の集い」

回	開催地	開催日程	開催テーマ
第1回	東京	1996/2/16～18	市民が支える森林づくり
第2回	東京	1997/3/1～2	「市民が支える森林づくり」の実現をめざして
第3回	大阪	1998/2/21～22	「市民が支える森林づくり」の新たな合意をめざして
第4回	宮城	1998/12/5～6	「市民が支える森林づくり」の新たな活動の広がりをめざして
第5回	高知	1999/8/19～22	山の中で考えよう！「みんなで支える森林づくり」私たちがめざすべきものは何か
第6回	東京	2000/9/15～17	暮らしとともに築く森づくり
第7回	広島	2001/2/9～11	新世紀 森林づくり・地域づくり・人づくり －よりよき関わりを求めて－
第8回	群馬	2002/9/14～16	ともに森を治める社会をつくりだすために 森と人と未来のための群馬ビジョン
第9回	北海道	2003/11/1～4	地域に根ざした森林とのおつき合い 森林づくりの現在を理念から行動へ
第10回	東京	2004/9/18～20	森とともに創るこれからの社会
第11回	愛知	2005/8/26～28	森がうごく、人がうごく。そしてネットワークへ。 森と人との関係をさらに深める。
第12回	大阪	2006/11/11～12	みんなが創る森づくり 森と共に生きる社会をめざして ～参加から協働へ～
第13回	福岡	2008/3/8～9	暮らしにつながる森づくり
第14回	東京	2009/12/5～6	今、あらためて問う「森林」の価値
第15回	岐阜	2011/6/4～5	裏木曽の森を歩こう
第16回	東京	2011/10/9～10	世界森林アクション・サミット
第17回	島根	2012/11/2～4	神在月に集え！島根へ！～森林と木を活かす縁結び～
第18回	東京	2014/3/22～23	暮らしとつなげる森林の恵み～都市の視点から考える
第19回	福島	2015/6/12～14	東北復興に果たす森林の役割と市民活動
第20回	東京	2016/6/11～6/12	温故知森～森と私たちとを結ぶ新たな道～
第21回	京都	2017/6/10～6/11	伝統－森林－未来へ ～森林と関わる暮らしの歴史を学ぶ～
第22回	東京	2018/6/16～6/17	変わりはじめた「山」・「ひと」・「街」 ～森の価値を分かちあう～
第23回	静岡	2019/6/15～6/16	あなたの森林・里山との「関わりしろ」を考える
第24回 【中止】	東京	2020/3/14～3/15	世界が取り組むSDGsを、私たちの森に活かす！ ～ともに学び、ともに歩む仲間をつくろう～

回	開催地	開催日程	開催テーマ
第 25 回	東京、岩手、宮城、福島	2021/3/7～14	「森林と市民を結ぶ」新たなカタチ ～東日本大震災から 10 年、コロナ禍のいま～
第 26 回	東京	2022/5/18～6/4	森は誰のもの？～森林コモンズを考える～
第 27 回	東京	2023/6/10～11	続・森は誰のもの？～森林コモンズを活かす明日へ～
第 28 回	東京、福岡	2024/5/8～6/2	人も生き物たちも喜ぶ森をつくるには？

※第 1 回～第 23 回は現地開催。第 25 回、第 26 回はオンライン開催。第 27～28 回はオンライン及び現地開催。

「森林と市民を結ぶ全国の集い 2025」実行委員 スタッフ名簿

名前	所属・肩書	役割
鹿住 貴之	認定 NPO 法人 JUON (樹恩) NETWORK 理事・事務局長	実行委員長
赤池 円	私の森.jp 編集長	実行委員
小野 なぎさ	一般社団法人 森と未来 代表理事	実行委員
國岡 将平	合同会社 MANABIYA 代表社員/鳥取県智頭町地域林政アドバイザー	実行委員
後藤 洋一	NPO 法人 樹木・環境ネットワーク協会 事務局長	実行委員
小森 耕太	認定 NPO 法人 山村塾 代表理事	実行委員
坂本 有希	フェアウッド・パートナーズ、一般財団法人 地球・人間環境フォーラム	実行委員
寺川 裕子	NPO 法人 里山俱楽部 事務局長	実行委員
水谷 伸吉	一般社団法人 モア・トゥリーズ 事務局長	実行委員
林 視	公益社団法人 国土緑化推進機構 政策企画部長	国土緑化推進機構
藤田 侑希	公益社団法人 国土緑化推進機構 政策企画部長	国土緑化推進機構
矢島 万理	公益社団法人 国土緑化推進機構 政策企画部	国土緑化推進機構
大石 淳平	認定 NPO 法人 時ノ寿の森クラブ 事務局長	監事
藤原 智史	林野庁 森林利用課 山村振興緑化推進室 課長補佐	オブザーバー
内山 節	哲学者、NPO 法人 森づくりフォーラム代表理事	顧問
宮本 至	NPO 法人 森づくりフォーラム 事務局長	事務局長
石山 恵子	遊学の道 project 代表	事務局
中沢 和彦	NPO 法人 森づくりフォーラム 広報部スタッフ	事務局

「森林と市民を結ぶ全国の集い 2025」報告書

発 行 日 2025 年 8 月

編集・発行 「森林と市民を結ぶ全国の集い 2025」実行委員会

事 務 局 NPO 法人森づくりフォーラム

東京都文京区本郷 2-25-14 第一ライトビル 405

E-mail : tsudoi@moridukuri.jp

編集・校正 宮本 至、石山 恵子、中沢 和彦

本集いは、「緑と水の森林ファンド中央事業」として実施されました。